

15:50 兄弟たち、私はこのことを言っておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。

15:51 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠るわけではありませんが、みな変えられます。

15:52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

15:53 この朽ちるべきものが、朽ちないものを必ず着ることになり、この死ぬべきものが、死なないものを必ず着ることになるからです。

15:54 そして、この朽ちるべきものが朽ちないものを着て、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、このように記されたみことばが実現します。「死は勝利に呑み込まれた。」

15:55 「死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか。」

15:56 死のとげは罪であり、罪の力は律法です。

15:57 しかし、神に感謝します。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。

15:58 ですから、私の愛する兄弟たち。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは、自分たちの労苦が主にあって無駄でないことを知っているのですから。

<説教>

「死者はどのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか」(35)。これはコリントの教会の中で「死者の復活はない」と言っている人たち(12)が出してくるであろう(または実際に出していたのかもしれない)問いでした。それに対してパウロはまず「どのようなからだで来るのか」ということについて答えました(36-49)。「御霊のからだ」(44)、「天に属する方、キリストのかたちを持つ」(49)からだで来るのだ、と。続く 50 節以降で「死者はどのようにしてよみがえるのか」という問いに答えます。結論的に言えば、「キリストの再臨のときに、朽ちないからだに変えられことによって」ということ、また、「神によって、私たちの主イエス・キリストによって」ということでもあります。

パウロは言います。〈兄弟たち、私はこのことを言っておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません〉(50)。〈血肉のからだ〉の直訳は「肉と血」です(口語訳)。それは「現在のこの地上にあるからだ」、つまり〈朽ちるもの〉、死すべきからだのことです。既に言われていた〈血肉のからだ〉(44)と内容的にはほとんど同じと言っていいでしょう。〈朽ちるもの〉である〈血肉のからだ〉は、永遠に朽ちることのない〈御霊のからだ〉に変えられなければ、「そのまま」では永遠に〈朽ちない〉〈神の国〉を相続できません。つまり、天国に入れていただくことはできません。既にキリストにあって死んだ者たちも、まだ地上で生きているキリスト者たちも、みな、イエス・キリストの再臨の時にキリストの〈栄光に輝くからだと同じ姿に変えて〉(ピリピ 3:21)いただく必要があるのです。既にキリストにあって死んだ者たちは、墓に葬られ、そのからだは朽ちていました。そしてキリストの再臨のときまでそのからだ

は朽ちたままです。そのたましいは既にキリストのもとに召されていますが「からだのよみがえり」を伴った「救い」はまだ未完成です。そして今（キリストの再臨前）現在、なおこの地上で生きている者たちも、イエス・キリストを信じて〈たましいの救いを得ている〉（Ⅰペテロ 1:9）のですが、既に学んだように、からだは〈血肉のからだ〉（44）であり、やはりからだを伴った救いは未完成です。故に〈血肉のからだ〉から〈御霊のからだ〉に変えられ、「救いの完成」をしていただかなければなりません。この、キリストの再臨のときに生きているキリスト者についても、やはり死者の復活はないと言っている人たちからの疑問というものもあったと考えられています。つまり、「一度死んだ者が新しい姿で復活するということは種の例えで説明されて一応何とか渋々受け入れるとして、ではキリストの再臨のときに生きている者はどうなるのか。種のように死んでもいない者は、朽ちる〈肉と血〉のままで〈神の国〉に入れられるのか。」という疑問です。それに対してパウロは、「血肉のからだのままで神の国を相続できない。故にからだも変えられる必要がある」と答えるのです。それはまさに「神のご計画、神のみわざ」、いわば「隠されていた神秘」であり、しかし今や神から特別に啓示された事柄、即ち〈奥義〉として告げると言うのです（51-52）。

〈終わりのラッパとともに〉（52）、即ちキリストの再臨のとき、地上で生きているキリスト者は、朽ちる〈血肉のからだ〉のままで神の国を相続できないとは言え、〈みな眠る〉、つまり一度死ななければならないわけではない。しかし〈みな変えられます〉、つまり通常の死を迎えることなく、いわば生きたまま〈血肉のからだ〉が変えられるのです（51）。しかもそれは〈たちまち、一瞬のうちに〉（52）です。それほど「あっという間」の出来事です。私たちには考えもつかず、想像もできないことで、だから〈奥義〉なのですが、そのようにしてキリストにあって死んでいた者は朽ちないからだをもってよみがえらせられ、そのとき地上に生きているキリスト者も朽ちないからだを持つ者として〈変えられるのです〉。なおパウロが〈私たちは〉と言って、自分や当時のコリントの教会の人々を〈死者〉に加えてにないので、パウロは自分が生きているうちに、今すぐにもキリストは再臨されると待ち望んでいた、または別の言い方をすれば、「今が終わりの時」であり、いつキリストが再臨されてもいいように備えていたということが分かります。もちろんパウロだけでなく、他の使徒たち、キリストの真の弟子たちはそう考えていました。

さてその〈変えられる〉さまはどのようなものか、パウロは説明します（53）。主の再臨のときに〈変えられる〉のは、私という「人格」のいわば着物である〈血肉のからだ〉です。私の〈朽ちるべき〉、〈死ぬべき〉からだ、が、〈朽ちない〉〈死なない〉からだに変えられるのです。

そんな「終わりの日」の「救いの完成」とき、聖書のみことばが〈実現〉、成就します（54-55）。54 節はイザヤ 25:8 の、55 節はホセア 13:14 の引用と考えられています。すべての人のどんな権力も金も暴力も意志も善意も〈死〉には全く無力です。しかし既に言われてもいたこと（26）ですが、〈死〉はキリストの再臨のとき、私たちのたましいとからだの救いの完成のときに完全敗北します。〈死〉の〈勝利〉と〈とげ〉は完全になります。

〈とげ〉は人を攻撃し、突き刺し、苦しめ、まさに死に至らせるもののことです。人は自分の罪の故にこの〈死のとげ〉の力である〈死〉をわが身に招いています。そして〈罪とは律法に違反すること〉（Ⅰヨハネ 3:4）、要するに神に対する不従順、背き、反逆です。

私たち全ての人が「律法違反者」、罪人であり、死の力に対しては全く無力なのです(56)。

しかし、私たちが主イエス・キリストを信じ、私の罪を、〈私たちの主イエス・キリストによって〉(57)神から赦され、罪の問題が解決されるなら、逆に罪が私たちに対して無力になり、私たちが罪に対して勝利する者とされるのです。それは〈私たちの背きの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられ〉た(ローマ 4:25)主イエス・キリストのおかげです。私たちではなく、キリストが十字架の死と復活によって、唯一人、人としても完全に罪と死に打ち勝たれました。神はこのキリストの勝利を私たちキリスト者に、分け〈与えてくださいました〉それゆえ、私たちにとって〈死〉は〈とげ〉ではなく、キリストのもとに召されること、〈神の国〉に入る門だとさえ言えるのです。それはただ私たち罪人に対する神のあわれみの故ですから、私たちはただ〈神に感謝〉しなければなりません。

そういうキリストの勝利に与る者とされ、死を恐れる必要もなく、キリストの再臨のとき、からだのよみがえり、変えられることへの希望を与えられているのが私たちキリスト者です。既にたましいの救いを得、からだを持つての復活をを約束されているが故に、今のこの地上にあっては、〈堅く立って、動かされることなく〉(これが「忍耐」の本当の意味です)〈いつも主のわざに励みなさい〉と命じられています(58)。自分自身の〈血肉のからだ〉(44)故の〈労苦〉があります。神の命令よりも人間の〈肉と血〉の要求に従いたい誘惑がいつもあります。しかしそれらにも打ち勝って神に従って歩む〈労苦〉は無駄にはなりません。(遅くとも)キリストの再臨のときには必ず主が報いてくださからです。